

5月31日

おとめ聖マリヤの訪問

Visitation of the Virgin Mary
～マリヤ、エリサベトを訪ねる～

<人名事典などでの別表記：マリア>

この祝日は、14世紀後半に教皇ウルバヌス6世により制定され、長く7月2日に祝われてきました。しかし近代になって、5月を聖母マリヤにささげられた「花の月」として覚えるようになり、この祝日も5月に移されました。

主イエスの母である聖マリヤのエリサベト訪問は、ルカによる福音書1章39節から56節に記されています。訪問の前に、天使ガブリエルは、おとめマリヤのもとに行きイエスの誕生を予告します。その際に、マリヤの親類であったエリサベトが高齢で不妊だったにもかかわらず、子どもをみごもっていることを告げます。この事実で神の力を証明し、彼女を勇気づけました。このお告げを受けたマリヤは、エリサベトに会うため、急いでユダの町にあるザカリアの家を訪ねます。マリヤの住むナザレからエルサレム南方のユダまでは、歩いて四日ほどかかる山道で、少女の足ではかなり大変だったことでしょう。この間、どんな気持ちで歩いたのでしょうか。額に汗をかきながら、今まさに起こっている神様の不思議なみ業に思いを馳せつつ、おさえきれない喜びを全身にあらわしながら、急ぎ足で歩む姿が目には浮かびます。



「聖母のエリサベツ訪問」

(Visitazione)

1528～29年

サン・ミケーレ聖堂

自分のもとにはるばるやってきたマリヤの声を聞いたエリサベトは、聖霊に満たされ、自分よりはるかに年下のマリヤを祝福しました。マリヤのことを、女性のなかで最も祝福された方と言い、「わたしの主のお母様」と呼びます。しかし、エリサベトがマリヤを賛美し祝福した本当の理由は、マリヤを神と同一視したためではなく、彼女が、主が語ったことは必ず実現すると信じたからだと言えるでしょう。

エリサベトの祝福を受けたマリヤは、謙遜な態度で、身分の低い、この主のはしためにも目を留められ、貧しいイスラエルの民を受け入れてくださる神の憐れみをたたえる賛歌、マグニフィカート（ラテン語で「神をあがめる」という意味）を唱えます。そしてこの賛歌で唱えられた、貧しい人々を顧みる神は、ルカによる福音書のなかに一貫して取り上げられています。

<特禱>

全能の神よ、み恵みによって主の母マリヤはエリサベツを訪れ、共に喜び、あなたを賛美しました。どうかわたしたちにもみ恵みを注ぎ、わたしたちがみ子を救い主としてほめたたえ、主の兄弟、姉妹と呼ばれることを喜びをもって感謝することができますように、み子イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン